

計 | 雨 | 晴



六年前、中学卒業二十五周年の会のこと、卒業以来という

女友達が私の顔を見るなり言った。「いくおちゃん、おめさんえらなって、そつ言えは中学

の時絵はち(通信簿のこと)だったもんね。それで幾らくらすの……」。そつ、彼女は私を高名な日本画家と間違えたのである。先週の本欄の私の名前が画伯の字になっていたが、時々間違われる。だから初めての人には「征服される夫と書いてい

広報課長をしていたとき、広報誌の巻頭随筆を先生にお願いし

同姓・同名

たところ、「同姓・同名の方に頼まれては断るわけにいきませんね……」と笑いながら快諾してくださいました。

絵をかきたいと思つて数年になる。都心の青山から自然に囲まれた(実は田舎)小田急線の沿線に自宅を建てて移ったのが

きつかけである。しかし、思いながらも忙しきにかまけてなかなか描けない。そんな私を子供がひやかす。そこで私は、「描いてもいいけど万一画風が似ていてそつかしいやつが間違えて買つと悪いからなあ」と答える。それで子供も納得する。私の場合は、それでも漢字で

書けば一字違つからまだ良い。先週書いた「事務所」の常連の中に元総理と全く同姓同名のS氏が居る。S氏は、昔秋田に出張するため電報で旅館を予約したところ、駅に知事の車が差し

回されるわの大騒ぎとなった逸話を持っている(その時S氏は

平山 征夫 (日本銀行 新潟支店長)

慌てず「アイ・アム・ソーリ」と言ったとか……。有名人と同姓同名というのもごまかすべくと本人も常に意識しなくてはならず大変だろう。

そう言えは、神戸時代、スナックで知り合いになった山本直純そつくりの画家H氏はどうしているだろう。昼時、銀行にふらりと来ては、持参のおにぎりを食いながら、「君は銀行員に向いていない。画家になつておれと一緒にやろう。そのままでも名前だけは一流画家なんだから」と妙な誘惑を私にしていたが……。あれからはや十年、その間一度だけ彼からはがきが来た。差出人名はH氏自慢のペンネーム「菌多」とあるべきところ「菌多」となっていたが……。

「晴雨計・その後」⑥

「同姓・同名」

平山征夫

二十四年前、このタイトルで随筆を書いたのは、その直前の「晴雨計」で新聞社が私の名前を間違ったからだが、知事になってからも手紙の宛名、会議での名札、名簿など随分間違われた。平山郁夫さんは惜しいことに六年前に亡くなられたが、今でも私に宛名の字間違いの手紙が時折届く。それは、平山さんが有名で皆に尊敬されているからと諦めている。

知事就任と前後して長女が芸大・ピアノ科に入学、憧れだった芸大の入学式に臨席したくて随

伴した。しかし、会場の関係が残念ながら父兄は式場に入れず、別室のモニターで平山学長の挨拶を聴いた。その後感心したのは、毎年学長直筆の年賀状が印刷ながら父兄宛てに届いたことだ。今でも大事にとってある。可笑しかったのは二〇〇二年に地元新聞社の記念企画で、「今なぜ天心カバルビゾンか」という対談を平山さんと元東大総長の有馬朗人さんと三人で行った時だ。TVは話している人が映るから良いのだが、新聞への掲載や、翌年本にしようとした際は、どちらが話しているかどう表示すれば分かりやすいかで新聞社ではひとめした。未だ間違われる毎に平山さんの偉大さを感じている。

知事を三期務め、その間は結構ニュース等テレビにも登場したので、少なくとも県内では顔・名前は売れていると思っていたが、それほどでもないことに退任後すぐ気付いた。街で逢う人から「おめさん、どこかで見たいような気がするけど・・・」と尋ねられると、あれだけ県民のため取り組んだのにと少し淋しい気もするけれど、そうなれば気楽で良い。「みっともないからタクシーで行ってね」という妻の注文も無視して好きなバスに乗る。ある日バスに乗ろうとしたら、運転手さんが車椅子のお客さんを降ろすのに悪戦苦闘中、思わず手伝ったら後日地元紙に「助けてくれたのは前知事さん！」という見出しで運転手

さんの投書が載り、ばれてしまった。七十歳の運転免許更新時に、元県警の人に「交通事故を起こすと必ず記事になるよ」と言われペーパードライバーを返上した。えらく警察には喜ばれた。ご褒美に一万円分のバスカードと半割パスというのを頂いた。有効期限があったので一生懸命好きなバスに乗った。その間、妻に内緒でささやかな冒険を楽しんだ。

絵の題材にしようとして海外に出かけ随分写真は撮り貯めたが、そろそろ本命のシルクロードに出かけようか、残り人生を睨みながら迷っている。

(平成二十七・八・十二)